

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 前田佳一

本論文はオーストリア出身の作家インゲボルク・バッハマン(1926-1973)の未完の長編小説『フランツァ書』*Das Buch Franza* をその断片性^{フラグメント}という観点から分析し、作品群のうちで占めるその特異な位置を明らかにすることを試みた労作である。

主人公フランツァがピラミッドの石に頭を打ちつけ致死性の傷害を受ける第三章の一場面の詳細な読解から出発し、三章からなる『フランツァ書』を章ごとに分析しつつ、バッハマンのヴィトゲンシュタイン論、詩、短編小説、講演などについての考察が頻繁に挿入される。これは他の作品群のモチーフ、イメージ、主題が執拗に反復される『フランツァ書』の構成が要請するものであるが、同時に本論考に大きな広がりを与えている。論述は、フランツァという人物形象における<変容>、主題およびモチーフとしての Grenze(境界/限界)、「読むこと」を核としたフランツァと弟マルティンの関係を中心として展開される。

前田氏によれば、ヴィトゲンシュタイン論において「世界の限界」が問題とされるが、バッハマンはこの限界を<境界>と強引に読み替え、境界の存在をいわば事後的に浮かび上がらせる<越境>という出来事を言語によって表現することを芸術の課題とした。この出来事を生の領域から死の領域への越境として造形するとき、生から死へと追いやられる「犠牲者」は、生と死の領域を往還するウンディーネという神話的形象と化すことでみずから声を獲得する。この形象は別の短編小説に登場するのだが、『フランツァ書』における主人公フランツァがいわばウンディーネ的な<変容>を経験した存在であることを、論者は虚構内現実のトポグラフィやイメージの分析を通じて説得的に論じている。フランツァが石に自ら頭を打ち付ける行為にいたる作品の展開の中で「犠牲者」「変容」「越境」「境界(亀裂)」というバッハマンの作品に循環的に登場するモチーフと主題が、その循環を自らの中に取り込むような形で一つの決定的な帰結を迎え、それによって『フランツァ書』は、以後の作品の先取りも含めいわば彼女の全創作を包含することとなり、そしてまさにそれゆえに単独の著作としては一つの全体として完結することはなかった、という結論は、それぞれのモチーフを丁寧に論じる<補遺>が充実していることもあり、今後のバッハマン研究に大きな刺激を与えるであろう。

従属的な位置づけを与えられることの多かった『フランツァ書』を中心とすることでバッハマンの作品群に新たな読みの可能性を提示している本論文であるが、概念規定上の問題(「人物形象」と「主体」の区別)や、「語り」の分析における問題(体験話法と「複数の語り手」の関係)などが認められる。また、完結した唯一の長編小説である『マリナ』との関連も詳しく論じられるべきであろう。しかし全体としては、本論文はバッハマンの研究史上、独創性ある論考として高く評価しうるものである。よって、本審査委員会は本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしい業績であるとの結論に至った。